

第二期 第三十八号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2019.09.20 定有堂書店 発行

本が大事

私の夏休み

「また来年、来るから…」と軽井沢でジョン・レノンは言った。

サッカーが大好きな少年たちのための2冊

古本屋の古をとれ

甲州街道を行く① — 多摩へ向かって

夏ヲ惜シミテ、ソノ余リ

坪井日記 ⑳

三十七号から続いて

鳥取あれこれ その三十七

演じる意識下に潜む…不可思議

書くに値すること 書くという衝動

屋台

映画のはなし

… 編集後記

奈良 敏行

ワクサコソウヘイ

萩原 俊郎

吉田 海将

鳥居 貴彦

芝野 浩貴

△ラカミヒロシ

齊藤 仁昭

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

土賀 啓三

あぎの素生

ドラマリア



本が大事

奈良 敏行

(定有堂 店主)

国立大の学生の前で話をしてみないかという誘いがあった。「本屋の話？ それとも本の話？」と問い返したら、一般学生に「本屋」の話は難しいだろう、本屋になじむという習慣がないから「本」のほうがまだ話題が見えやすい、と応答があった。そして「本」を読まないから、「本が大事」というテーマがいいかもしれない、と話の方向が具体化していった。

前に学生の牛木のどかさんが、定有堂の仮店舗として「三週間本屋」という企画を公立大学で行なった。学生が本を読まないのは校内に書籍売り場がないからだ、仮設売り場を短期間でも実現すれば風穴を開けられると考えたのだ。二年二回実施したが何も起動しなかった。彼女はがっかりしたようだ。そしてりっぱな書籍売り場がある、国立大学でも、学生は本を買わない。

定有堂にも学生が訪れ会話を交わすことがある。地元はもちろん、ときには隣の国立大学の学生も顔を出す。そして本を読む。「いろいろな気になる本がありますね。どんな本を読んだらいいですか?」「これとこれがオススメですよ」。すると「スマホで写していいですか」で終わる。買わない。一方ときたま近くの進学校の生徒が母親と一緒に来店する。一時間ほど滞在して二万円弱の支払いを母親がする。この違いはなんだろう? いわゆる文化資本(再生産される文化的蓄積)の違いなのだろうか。

わたしが学生の前で「本は大事」と話しても、すでにとり返しのつかないもどかしさがある。「本が大事」ということは人を説得するようなテーマではない。「本が大事」と思う人がいると告げる、それだけで事は終わる。遠くに出かけて「本が大事」と話すのも考えてみればおかしい。定有堂教室「読む会」という読書会にはひんばんに人が訪れる。本は読みたい人が読むし、縁のない人には路傍の石ころに等しい。

八月のテキストはマルクス・ガブリエルの『なぜ世界は存在しないのか』だった。別の本のだが、ガブリエルは、「ユニコーンは映画や物語という『意味の場』では存在しますが、現実の東京には存在しません」という。ここで大事なのはユニコーンという物語性あるまじまじ

た内容は『意味の場』には存在するといっていることだ。全体性としての世界は存在しないが、この物語性は個々の人間の中に存在する。「新しい実在論」はこのように、個々の中に確固として存在するなにかを、足場としている。

「世界は存在しない。存在しているのは、無限に数多くの意味の場だけです」p.106「意味とは対象が現象する仕方のことである」p.101

「2+2」や「3+」は与えられ方であり、これを「意味」という。「現象」といってもいい。この数式は「意味」(与えられ方)は異なっているが、指し示している当のもの(つまり4)は同一である。

この「意味の場」が本を読むという行為の場所のようだ。世界は体験によって生成されるものであって、わたしたちは世界を体験するわけではない。異なる体験であれば、指し示していく「当のもの」は同一である。「本」の中で体験を成長させ、外部(マルチバース)を予感することが楽しい。「体験」は「経験」の外部なのだ。そしてその「体験」は「本」の中にある。

「本を読む人」に出合って「本のたのしさ」が広がる。でもそのためにはすでに本を読んでいなければならない。一味同心の阿吽だからだ。

「本」とは、この「与えられ方」の多様な展開の場だ。

「本」と袖すり合い「縁」の中で再生産されていく。本屋はこの「縁」がはじまる数少ない一つの「場」なのだ。本に縁ある人が集まり、その本との縁という、「意味の場」を語る本を読みあう。本を読むということは、ユニコーンを実在させる「意味の場」という「与えられ方」を、共有（体験）するということなのだ。

これはすでに現象していることであって、人を説得するようなことがらではない。本屋には本を買う人と買わない人が訪れる。本のあるところ「情報」が豊かに漂う。ユニコーンを幻視する人とならない人が今日もここですれ違っていく。

2019.08.2

2

マルクス・ガブリエル 『なぜ世界は存在しないのか』 講談社

選書メチエ 2018

マルクス・ガブリエル 『資本主義の終わりか、人間の終焉か？

未来への大分岐』 集英社新書 2019

本の紹介

（「寄贈いただきました。奈良」）

石橋毅史

『本屋がアジアをつなぐ』 ころから 2019.8

石橋毅史さんは、『本屋』は死なない』をはじめ、多数の出版・本屋論を世に問いつづける出版ジャーナリスト。

「本屋」を絶やしてはならない、というのが核心の主張。

著書が東アジア各国で翻訳されたのがきっかけで、アジアへと取材の足が伸びる。いま熱い香港。そして韓国。誠品書店を訪ねての台湾。中国では歴史的存在の内山書店。

この本の副題には「自由を支える者たち」とある。

しかし本屋が社会派的自覚を持つわけではない。日常身の丈のナリワイだ。自由は「本」の中にある。「本」を愚鈍に守る」とで、知らず知らず「自由」の守護へと、歩を進めるだけだ。

著者の中で「自由」と「本屋」はひとつのことのようだ。

だから、本屋をショップ空間でなく「人」で語ることにする。

石橋さんが、「本屋は人だ」という立脚点を繰り返し語るのには、「自由」を支えるのは「人」だけだという体験を、軸にするからかもしれない。

私の夏休み

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

夏が好きだ。夏が、狂おしいほどに好きだ。だから今回は、小学生の作文のようなタイトルでもって、今年の夏をプレイバックしたいと思う。

まず、梅雨が明けるのを待ちきれなかった私は、6月の下旬から7月の中旬にかけて、夏休みの国であるタイとカンボジアに攻め入った。バンコクはうだるような暑さと湿気に包まれていて、またシエムリアップにはカラッとした日差しが注いでいて、どちらも最高であった。カンボジアではアンコールワットに訪れ、ハッピーピザなる怪しげな粉末が散りばめられたピザに手を伸ばし（大麻とか入っているんじゃないかとドキドキしたが、店員さんに聞いたらただのハーブの粉末であった）、プールで泳いだ。タイでは清潔なゲストハウスに滞在して、新刊の『ヤバイ鳥』入稿作業を行った。

日本に帰ってきてからは、島根県まで石拾いの旅に行った。さすがは「玉造」の地、ちよつと磨けば勾玉になりそうな美しい石が、あらゆる海岸に詰まっていた。石拾いほどエモーショナルなレジャーはほかにはない、と私は常々主張している。自分にとって「価値のある」石を拾い、それを取捨選別している時、人は無心のうちに自分の嗜好や癖と向かい合うことになる。心が静かに揺れ、風景は満たされていく。波打ち際の波が、素足に気持ち良い。小石の感触が足裏に伝わる点も、ソーグッドである。きつと近いうちに空前の石拾いブームが来ると、私は睨んでいる。

7月の後半から8月の頭までは仕事で忙しくしていたのだが、無理やりにそれを中断し、お盆休みに突入した。普段は家族でだらだらと鳥取は八頭の実家で過ごすことが常なのだが、今年は一味違っていた。友人たちが、鳥取まで遊びに押し寄せてきたのである。

上海からは文筆活動家にして「秋田県・わさお」の発見者および命名者であるメレ山メレ子さん、博多からはメレ山さんのお姉さん、同じく博多から革で恐竜やイカをつくっている不思議な職人・コケコくん、茨城県からは虫屋のミホさん、そして東京からは昆虫やクジラをモチーフとした自然科学系アクセサリー職人のメミさんと、一癖も二癖もある友人たちである。京都水族館の生物紹

介看板のイラストを一手に引き受けている「魚譜画師」の長嶋裕成氏も突然に途中参加を果たしたりもした。

私は彼らを、鳥取中に連れまわした。浦富海岸の熊井浜や鴨ヶ磯でシュノーケリングをし、ウミウシを採取しては水槽に並べて、ミニ水族館をつくった。夕暮れの砂丘で、昆虫観察を行った。砂にまみれた身体を、岩井温泉やみさき屋の湯船に沈めたりした。浜村のホットエアーで塩ラーメンを堪能した。松崎の怪施設「ロマンの里展望台」を巡り、また汽水空港や県立博物館、それからもちろん定有堂にも連れて行った。そして毎晩、大宴会が開かれた。私はYパブでしたたかに酔い、毎朝、爽やかな日差しとともに目覚めた。これ以上はないほどに、愛おしい夏が、そこにあった。

正直、35歳にもなった現在、子どもの頃よりも楽しい夏休みが来るなんて、思ってもいなかった。

今年の夏、私はかなり減入っていた。予定していた十万字の書下ろしを、二万字までのところで断念してしまい、落ち込んでいたのだ。ほとんど外にも出ず、白い肌だけが秋に引き継がれていった。

今年の夏は、なんてことだろう。いままでの人生において、ベスト1の夏休みであった。私は自由業で、言っ飛ばさずと宿題を気にしながら永遠に終わらない夏休みを毎年過しているわけだが、そんな「夏休み状

態に麻痺している」身であっても、今年の夏ははつきりとクリアに夏休みであった。

こうして私は夏に終わりを告げて、そのままのテンションと勢いで、ひとりの担当編集さんに連絡を取った。

「昨年断念した書下ろし、もう一回、挑戦させてください」

私はもう、無敵の気分であった。万能感に支配されていた。この夏休みを越えた私に、向かうところ敵なし、といった感じであった。

そして現在。設定したメ切の一週間前。まだ一行も書けていない。私は机の上で、頭を抱えている。すべて、ハッピーピザのせいだと思っっている。

編集部注：

ワクサカソウヘイさん 最近の刊行物

『動物たちの青春白書』 柘出版社 2019.06 本体一三〇〇円

『ヤバイ鳥』 柘出版社 2019.08 本体一三〇〇円

「また来年、来るから…」と軽井沢でジョン・レ

ノンは言った。

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

毎年六月は軽井沢に一泊の旅に出る…と言うと、なにか優雅な暮らし向きのように思われそうだが、なんのことはない、その時期に地方紙の東京支社長会の総会が軽井沢で開かれる、というだけである。

総会ぐらいいなら都心のホテルでもいいようなものだが、目当ては総会翌日の懇親ゴルフにある。軽井沢でゴルフ。まったく、こんなことやってるから新聞は衰退するんだ…ま、それはともかく。

ゴルフをやらない私は翌日、フリーの身になる。さて、何をやるうか。軽井沢といえば、そうジョン・レノンだ。

◇ ◇ ◇
七五年にオノヨーコとの間に待望の次男ジョンが生まれ(ジョンにはビートルズ結成前に結婚していた糟糠

の妻、シンシアとの間に長男ジュリアンがいる。彼はジョンに瓜二つなのだが売れなかった)、一家は七七年から毎年、ヨーコの実家の別荘に近い「万平ホテル」で夏を過ごすようになった。まずはそのホテルを目指そう。

万平ホテルは思ったより遠く、着いたころはへとへとになった。山荘のようなクラシックなホテル。軽井沢でジョンの残影を探す人間は、ここで「ある飲み物」を注文するのがお決まりになっている。紅茶の茶葉ごとミルクで煮だした「ロイヤル・ミルクティ」。ジョンが所望してメニューに加えた「直伝の味」というふれこみだが、安田財閥のご令嬢だったヨーコならともかく、「ワーキング・クラス・ヒーロー」のジョンが「ロイヤル…」というのもねえ。なんだか怪しい。

次に、ジョンが毎朝フランスパンを買いに通った「フランスベーカリー」を訪ねた。周辺はパステルカラーに塗られた土産物屋やクレープ屋が建ち並び、原宿並みにごった返している。ママチャリに乗って来店した在りし日のジョンの写真が飾ってあったのが目を引いたが、菓子パンや総菜。パンも並ぶ、いたってフツーのパン屋だった。

◇ ◇ ◇
まあ、こんなものか、観光地というのは。ラジオで訃報を聞いたのは四十年近く前、新聞社に入

社する直前の冬だった。青春が終わった気がしたのは、学生時代の終わりとも重なったこともあるかも知れない。

もう軽井沢の楽しみもなくなった、と思いつながら、翌年もう一度、ジョンゆかりの地を訪ねた。別荘地の森の中にあるカフェ「離山房」。命名は作家の水上勉という。

◇ ◇ ◇

到着すると、客は私ひとりだった。テラスの一番奥に座り、ここの名物、ブルーベリージュースを注文。

すると、「そこは、いつもジョンとヨーコさんが座っていた席なんですよ」。客がいなくて暇だったのか、五代後半とおぼしき女主人が話しかけてきた。

ジョン一家が訪ねたころは先代の女主人が経営していたが、彼女も店を手伝っていたという。「最初はタクシー、その後は毎日のように自転車で来られました」。万平ホテルからはかなり距離がある。

「よろしければ、一家がくつろいでいた東屋にご案内しましょうか」。親切な女主人はカフェから少し離れた八角形の東屋まで連れて行ってくれた。そばの木に鉄の小さな杭。「それ、シヨーンの背の高さを記念に残したものだ」。東屋にはビーチチェアが並んでいた。「一家がよく昼寝していたチェアです」。エーツ、これ本物なのか。森閑とした東屋に、夏のバケーシヨンを楽しむジョン一家の息遣いや笑い声が伝わってくるようだ。

再びカフェに戻ると、ケースの中にロンソンのライターとジタンの煙草が飾ってあった。「万平ホテルにニューヨークから電話があつて、あわてて帰られた。その時の忘れ物です」。電話は、アルバムを制作するので至急アメリカに帰られたし、というものだった。

「ライターと煙草をお忘れですよ、と電話したら、ジョンさんは『また来年来るから、置いといて』と。それが最期の言葉になりました」。その後制作したのがラストアルバム『ダブル・ファンタジー』（八十年）だ。

ジョンはソロになって「イマジン」などの名曲を生みながらすさんだ私生活を送り、ついにヨーコから愛想をつかされて別居生活。ところが「子はかすがい」と言うべきか、シヨーンの誕生で音楽活動を休止して「主夫業」に専念。そこで家族のやすらぎを知った。

「いろいろ大変なことがあったね。もう一日だって無駄にしたくないよ。もう一度、やり直そう」（アルバム収録曲『スターティング・オーバー』意識）。

「ジョンの魂」は、このカフェにまだ漂っている。来年もまたこの小さな東屋を訪ねよう。

※ライターと煙草は8年後にヨーコに返され、飾ってあるのは同じ物だそうです。

サッカーを読む(書評)

サッカーが大好きな少年たちのための2冊

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

六年前にスペインに遊びに行った時、現地の若者にまじり、ストリートサッカーを楽しんだ。しかし四十代に入り、子どもが小学校高学年を超えると、実際のプレーではかなわなくなった。ならばと、見つけたのが「サッカーを読む」楽しみ。今回は、本はちよつと苦手だというサッカー少年でも、読み始めたらとまらなくなることに間違いなし!の2冊を紹介する。

まず、芥川賞を受賞した芸人、**又吉直樹の「第2図書館保補佐」(幻冬舎よしもと文庫)**。「生活の傍らに常に本という存在がある」という彼がお薦め本を紹介する

中で、選手としての転換点となった、ぶつとんだエピソードが盛り込まれている。全国で指折りの強豪校だった大阪・北陽高でレギュラーだった又吉。練習をサボってばかりいたという小学生の彼の心をつかんだのは、西ドイツとアルゼンチンの顔合わせになった一九九〇年イタリAW杯決勝だったという。

躍動するマラドーナを見た彼は、翌日から利き足の右ではなく、左足でしかボールを蹴らなくなった。久しぶりに練習に登場した彼の行動を、仲間の多くは罵倒したという。しかし、練習をほとんど休まなくなった彼は数カ月後には「左利き」になり、左サイドのポジションを任されるようになったという。

サッカーだけでなく、スポーツ全体にいえることだと思いが、利き足や利き腕を変えることは、容易ではない。利き足で練習を重ねることが上達の道、と考えるのが普通だ。潜在的な能力はあったのだろうが、W杯決勝の試合を見て感動し、マラドーナという大きな目標を持ったことが、彼独自の成長の道につながったのだろう。常識や周囲の意見だけにとらわれず、時には遊び感覚で発想を変えてみることも必要だ、ということか。

二冊目は「**カンフノウの灯火」(豊福晋著、洋泉社)**。リオネル・メッシがFCバルセロナの下部組織にいた時に、一緒にプレーした少年たちの「その後」を追ったル

ポ。13歳のメッシが仲間と収まる一枚の集合写真を手がかりに「隣にいた選手はどこにいるのだろう」と、著者は街を歩き取材を始める。カンブノウは少年たちが将来プレーすることを夢見たバルサのホームスタジアムの名称だ。

例えば当時「メッシを超える」と言われたという逸材、ディオンは、セネガル出身。メッシと一緒に前線でプレーし、シーズン得点王にもなった。しかし、早熟だったフィジカル面が、周囲の成長とともに通用しなくなり、夢半ばでボクシングへ軌道修正。スペイン南部の町のジムで少年たちにボクシングを教えていた。

訪問前に彼を「悲しき失敗例」として見ていた著者の考えは、彼やその周囲の人との対話で徐々に変化していく。メッシやバルサの事を聞かれ、当手を振り返りながら話す彼の表情は険しい。しかし、グローブを持って少年少女を指導する顔からは、すぐにその厳しさが消える。「そこにあつたのは生徒と戯れる、ひとりの青年の姿だ」養父や慕ってくれる教え子たちに囲まれて日々の生活を送るディオーン。「メッシになれなかった男は、しっかりとディオーンの人生を生きていた」

電気工、給食補助員、動物飼育士……ほかにもかつてのメッシのライバルたちの十数年後の現在地が語られている。ありふれた日常生活だけでも、その多くは「目

の前の日常を必死に生きていた」。

本のサブタイトルは「メッシになれなかった少年たち」。メッシにあこがれるサッカー少年がこの本を手に取り、夢を追いながらも「自分だけの道」を見つけるヒントにしてほしい、と願う。

(参考) 編集部注

又吉直樹『第2図書係補佐』幻冬舎よしもと文庫 2011

豊福晋『カンブノウの灯火 —メッシになれなかった少年たち』

洋泉社 2016 (品切)

古本屋の古をとれ

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

手元に数ヶ月前に書いたメモがある。「古本屋の古をとれ。」なんだこれは、としばらく考えて思い出した。那覇の居酒屋で、上機嫌に酔った古本屋のオヤジが熱弁していた。隣には東京で古本屋をしている兄ちゃん。こっちもかなり酔っていてオヤジの話にうまいこと合いの手を入れ続けている。どんどん機嫌が良くなるオヤジ。話は最近の不動産屋事情からネットで古本を売る話に瞬時に変わり、かと思うと沖繩の古本業界の話、オヤジの兄貴の話へとまったく脈絡がない。とつぜん、東京の兄ちゃんがいった。「つまり、古本屋の古をとれってことすよね！ おれその話メモります！ここに！書きます！」そういって手元の紙にペンを走らせた。それをみて自分も意味のわからないままにメモを書いたのだった。ぼくも

相当酔っていたのだと思う。

「古本屋」から「古」をとったらどうなるのか。「本屋」になる。ただそれだけの話。でも、酔ったオヤジがふたりの酔った若者に言いたかったのは、それだけなんだろうか。

いま、待賢ブックセンターには新刊と古本が混在している。ごく稀に古書と呼んでもいいようなものもあるし、バーゲンブック(新品だが値引き販売されているもの)もある。新刊書店と呼ぶには雑誌もない、コミックも少ない、古本が多すぎる。古本屋と呼ぶには平台に積まれた新刊があり、たまにミニフェアやパネル展のようなものもやっている。

実際、「この本はいくらですか？」と聞かれることが多い。古本と新刊書籍が混在していてスリップが入っていたり価格が書いてあったり、均一の箱にまとめてつっこんであったり。ややこしくてかなわない。それは古本、そっちは定価。それは新刊だけど割引出来るやつ。そのミニカーは気に入ったんならあげるし持って帰り。そのピーナツは食べ始めると止まらんから気をつけて。と、いろんなことを言う。いったいここは何屋なんだろうか。

だから、本屋でいいんじゃないか。

真つ先に待賢ブックセンターを取り上げてくれたブログがある。とくに何の許可も取られなかったがいつのまにか記事になっていた。そこには「京都の西陣に新しい古書店が新店オープンしています。京町家を使った「開風社 待賢ブックセンター」さんというお店で、丸太町通から大宮通を北へ上がったところにある古本屋さんです。」とある。目にした直後、ああ古本屋か…と思った。半分以上は新刊なんだよ。ちゃんと話を聞いて欲しかったな。

だが古本屋ではない、と言い切れる気もしない。新刊書店でもない。駄菓子屋みたいですねと言われるとちよつとうれしい。

だから、本屋でいいんじゃないか。

雑誌の配達をはじめた。といつても近所にある、以前から知り合いの喫茶店一軒だけ。たまたま喫茶店で珈琲をのんでいると隣の席のお客さんが「週刊誌とかあったらええなあ」といいだした。「そうですねえ」と答える店主。帰り際、「配達しましよか？」と聞いてみた。

月刊誌2つと週刊誌ひとつ。店に配本はない。毎回発売日の前日に問屋に注文し、翌日の昼過ぎに届く。木曜

日発売の週刊誌が届けられるのは翌日の午後だ。あまりにも遅い。とても商売とはいえない。逆に迷惑なんじゃないかと思うこともある。それでも喫茶店の店主は「町の本屋ですね」といつてくれる。

古でもなく新でもなく、町の。

結局、なに本屋でもいいのかもしれない。そこに来た人が古本を見つけたらそこは古本屋になる。新刊が目についたら新刊書店だし、駄菓子ばかり買っていく人にとつては駄菓子屋だ。ここは本屋です、という説明をいくらかしたところで、いやここはたんなる本のある場所です、という人もいるかもしれない。いてくれたらいいと思う。とりあえずしばらくは本屋と名乗ってみよう。

「開風社 待賢ブックセンター」 2019.03.29 オープン
京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

甲州街道を行く ① 多摩へ向かって

芝野 浩貴

(地球探険家)

九州豪雨の被害で鹿児島を中心として大変だった時期、八月の沖繩プロボノの打ち合わせのために御茶ノ水にいた。プログレを演奏しプロレスを行い、ルービックキユーブの本も出し、かつては麻雀にもめり込んだ遊歴算家Sとスカイダイビングやスキューバダイビングに挑戦し続け、落語家に弟子入りをして、ツーリングに出かける遊歴算家Mの武勇伝を聞いていた。一方では、この二人との縁が八王子だった事を思い出し、五街道歩きの決行を一人で決めていた。

それは、甲陽鎮撫隊の道でもあり、玉川上水源泉への旅でもあった。

何度も通り過ぎた日本橋だが私の街道紀行でいうと東海道を完歩した時の起点(2016年、20日間、632キロ)であり、中山道を完歩した時の終点(2018年、18日間、659キロ)でもある。魚河岸跡、高速の下になった江戸橋を横目に橋を渡ると高札場跡がある。コレド日本橋の交差点で東海道と別れ右折して呉服橋を渡る。江戸城南堀を時計回りに歩くと雨の中で皇居マラソンをしている都民と何度もすれ違う。柳の井を過ぎて武蔵野台地の尾根である半蔵門が高台であることを確認。ここは、分水嶺で北側に流れる水は神田川から隅田川へ、南に流れる水は渋谷川から品川へ移動する。家康といえば、伊賀越えや三方ヶ原の戦いではないが逃げるイメージがある。固くて高くて地盤の安定する尾根を利用して、有事の際の駿河への逃げ道として江戸城から富士山の方向に作ったのが甲州街道である。

その時は服部半蔵を伴う。半蔵門から今教育界で話題の麹町へ。麹町とは小路が多かったら、米・麦・大豆の発酵の素の麴を作っていたから、国府へ向かう道の国府路だったから、などの名前の由来がある。武士が住む境界隈だが、新宿通りの甲州街道沿いは町人や商人も住んでいた。四谷門のところに玉川上水の水見舁がある。大きく凹んだところに総武線や中央線が走るがかつての外堀である。甲州街道、青梅街道へ繋がり、薪炭や青果な

どの生活物資を運ぶ要衝であった。服部半蔵の墓や家康の息子信康の供養塔(西念寺)、塙保己一や内藤新宿の開設者高松喜六の墓(愛染院)、四谷怪談お岩を祀る田宮神社を過ぎると四谷大木戸へ。ここは江戸城への西口で玉川上水の取水口があり、水番所があった。京都盆地は井戸が掘れるが、江戸は隅田川が低くて引けない。そこで武蔵野台地の地形をそのまま利用して標高差が100mしかない多摩羽村から大木戸まで43キロに露天掘りで水路を引いた。その後は地下水路で、水桶・石桶で江戸市中へ。新宿三丁目の青梅街道追分辺りが日本橋から2里でそこからひたすら20号線を歩く。かつては笹に覆われていた笹塚が3里、下高井戸宿(4里)、上高井戸宿から仙川(5里)までは旧街道、国領入り口まで20号線で、布田5ヶ宿内(国領、下布田、上布田、下石原、上石原の5宿で一ヶ月を分担して問屋業務をした)は旧甲州街道(6里)。京王線という国領―布田―調布―西調布―飛田給―武蔵野台―多磨霊園―東府中の区間である。東府中駅で品川街道と交わり(7里)、府中高札場は鎌倉街道と交差する札の辻となっていた。京王線と別れて南武線沿いに歩き、本宿碑(8里)を過ぎて、日野の渡し場跡を確認後、多摩モノレールに沿って立日橋を渡る。(9里)多摩川とはここでお別れで、この上流十数キロのところは玉川上水の始原の羽村取水堰がある。府中は生糸の商家が多いのは、

日野宿周辺が蚕糸場だったから。問屋場、高札場、日野本陣跡、日野図書館、天然理心流佐藤道場(土方歳三や沖田総司らが稽古した)が密集。日野自動車西外れの日野台の一里塚(10里)を過ぎ、八高線を跨ぎ、八王子へ繋がる大和田橋(八王子市は太平洋戦争終了13日前の8月2日にB29の空襲にあったが、焼夷弾跡がこの橋に残ってる)を渡ると竹の鼻の一里塚。(11里)中央線八王子駅の北側を西に進み(この辺りの甲州街道は江戸時代のままの広さと同じ、大久保長安の存在感大)、追分町から千人町へ。(千人同心の拝領屋敷が並ぶ)散田の一里塚(12里)のあたりから多摩御陵まで銀杏並木が続き、町田街道の入り口を過ぎれば高尾に着く。薩土討幕の密約を西郷隆盛と交わした板垣退助。地元多摩を守ろうとした新撰組。千人同心は半土半農だったのか。どこまでが官(武士)で民(農民)なのか。官は民のために生きているのか?多摩御陵を前に令和天皇が水の研究者である事に敬意を表しながらも、令和・政治・新撰組が頭をめぐり、足は止まった。

夏ヲ惜シミテ、ソノ余リ

ムラカミヒロシ

（フライング・ブックマン）

心なしか高くなつた空に刷かれた絹雲を見て、ああ夏も終わるなあ、と感じた八月末。ブ〇ク〇フ・モ〇ル店に出かけた。市内では、一番品数の多い新古書店である。古い本が多いのも古書好きには嬉しい。

半月ほど前には、早川のポケミスが百冊近く出ている、極端にレアなアイテムはなかったものの、懐かしい書目が沢山あり、思わず十数冊、カゴに放り込んでしまった。今回は、角川文庫の横溝正史が十数冊入っていた。横正は、十年ほど前に、某作家のエッセーに刺激されて、コンプリートを思い立ち、市内の新古書店をコツコツ回って、結果、九十数冊を二年で完蒐することができた。流石に今は、初期の白背は見なくなつたし、「八つ墓村」の元カバー版に至っては古書店にも滅多に出回らないか

ら、専門店かネットオークションに頼るしかないが、通常の黒背は丹念に足で稼げば、今でも三〜四年でコンプリートできるのではないかと思う。

さて、その日、ラノベではない文庫の棚に、珍しく高校生らしい二人組の姿があつた。目を引いたのは、どちらも部活一直線という感じのガタイで、ついぞ本など読みそうにないタイプだったから。一人が、棚を物色し、一人はスマホを眺めている。一瞬、セドリかと思つたが、小遣い稼ぎにせよ高校生には難しかろうし、どうも話の内容が、読みやすいの、にくいのと違ったもので、兄弟らしくもある。どうやら、読書感想文の課題の本を探しに来たものらしい。しばらくして、母親と思しき人物も合流したので、家族で宿題の本探しに来たものと察せられた。微笑ましいというか、始業式は何時だよ、おい、という話なのだが、新刊書店でなく、新古書店にやつて来る辺りが今時かなあ、と思つたことである。

今時と言えば、親子連れの姿も、児童書の棚でよく見かける。孫を連れのお爺ちゃん、の場合もある。子どもの本くらい、新刊で買ってやれよ、と思わぬでもないが、御家庭の事情もあらうから多くは言うまい。ただ、ブ〇ク〇フの児童棚はチャラチャラした今時の売れ筋か、死

に筋（地味系出版社や昭和時代の本など）かの両極端が大半で、真ん中のスタンダード部分がほぼスッポリ抜けている。こういう、偏った品揃えの中で選ぶのはなあ、と思うのである。

さりとて、新刊書店にはあるのか、といえば、市内最大の書店にしても、児童書コーナーは冊数こそあるものの、やはり売れ筋ばかりで名作の類は殆どないか、あつてもナントカ文庫やアニメ絵本まがいのリライト本。まあ、乙甲といったところかも知れない。

で、読書感想文に戻る。件の二人がどんな本を選んだのか気になり（覗くようなはしたない真似はできなかつたので）、ちょっとだけ推理してみた。

立っていた場所は文庫の日本文学の棚。それも、お終いの方。見出しとしては、や、ら、わ行の辺りである。

国語教諭が選びそうな古典、ないし準古典がターゲット。エンターテインメント系は選ばれることもなからうから、山田悠介や米澤穂信は除外。となると、柳田邦男、吉本ばなな、吉村昭、綿矢りさあたりか。吉行淳之介、渡辺淳一は：あるまい。山崎豊子も長大作品が多い。山本周五郎や吉川英治は時代ものだからハードル高し。となると、吉村の「戦艦武蔵」「罨嵐」「三陸海岸大津波」あたりか。「海も暮れきる」でも読んでくれると嬉しいが、

知らない教師も多からう。吉田満の「戦艦大和ノ最期」もタイミン的にベストで（「アルキメデス」、当地には来たのかな）、二百ページ以下と願ったり叶ったりだが、開けてビックリ「我ラ国家ノ干城トシテ大イナル榮譽ヲエラレタリ」式のカタカナ文語調。これは、時代小説以上に手強い。どころか、日本語として認識できない。出題教員が女性であれば、ばななや綿矢や山田詠美も可能性はありそうだが。まあ、男子が選ぶとすれば、実話系が妥当。完読ができなくても、如何様なりと感想は書ける。というところで、吉村昭と目ぐしを付けたのだが、合つてたかなあ：。

およそ、読書感想文は、スタンダードで生真面目な作品こそ最良とすべき。確かに、読むのは苦行だが、感想は様々な側面からアプローチでき、教師がびっくりするような独自の視点を持った作文にはならない代わりに、欠点を取るようなひどいものにもならない。

自由課題なら、絶対に教師が読んでいないような作品を選んで煙に巻くのが一番。シュルレアリスム系の詩人とか、ローマ時代の劇作家とか。もつとも、相当しつかりした文章が書けなければ説得力がないので、諸刃の剣ではあるけれど。

坪井日記 ②

齊藤仁昭

(長崎書店)

滴が終わるまで2時間くらいかかったけどそんなに長いものだった。点滴のあとには朦朧としていた意識もだいたいぶん元に戻ったようだった。

両親の家が日赤の近くなので子どもはそこに預けておいた。診療後は僕も実家に戻り泊めてもらった。その後一週間熱は下がらず、だいぶ欠勤してしまった。来月は給料が減っているだろう。病院代も高かったし。風邪は引いたらすぐ休まないためだ。

8月某日

風邪をひいたが無理して3日間仕事に行き、4日目の休みの日の夕方に昼寝して起きたら体がものすごくだるいし熱かったのでこれはまずいと思って体温を測ったら40度を超えていた。明日はもう仕事は無理だろうしこれから寝込むハメになりそうなのでひとまず店長にメールだけしておいて夜間診療をやっている日赤へ妻に送ってもらう。アパートの階段を降りるにも足元がおぼつかない。

日赤に着き受付を済ませ、寒気がひどかったのでタオルケットを借りてソファで横になって呼び出しを待つ。一時間弱待って疲れ果てた。診察はかなり丁寧にしてくれたし、血液検査、尿検査やレントゲンも撮影したが異常なし。風邪がこじれたとしか言えないので、とにかくしばらく休んでくださいと言われ点滴をしてもらう。点

偉大なるフェルナンド・トーレスが鳥栖で引退した。18年の選手生活に後悔はありますかという問いに「何も無い」との答え。僕は感動して泣きました。彼は常に全力を尽くしていた。素晴らしいセンターフォワードでした。トーレスに宛てた恩師シメオネのコメントも良かった。out.com から引用します。「フェルナンドはとても聡明な人物でありフットボールの完全な伝説だと思っている。それを気概と、努力と他者の敬意でもって勝ち取った。人間としても選手としてもいつだって素晴らしいカテゴリーに位置していたのが彼だ。」情熱とともに知性が溢れているスポーツ選手や監督のコメントには憧れてしまう。

8月某日

妻が小学生の頃いじめられてたという話を聞いたのだが、「いじめにはいじめられている側にも原因がある。」などと言う。そんなこと絶対に無い、いじめはする方が100パーセント悪いと思うと伝えたが妻は頑なに認めない。そんな考え方はおかしいと思うけどな。日本語独自の考え方なんだろうか。日本には被害者の方を責める風潮があるのは何なんだろう。よその国にもそう言う考え方が少なからずあるのだろうか。ありそうだな。しかし僕はそういうのは全く理解できないし、加害側の都合のいいエセ論理でしかないんじゃないかと思う。

8月某日

月末の神戸と岡山のライブに向けて練習。2日で11時間スタジオに籠る。せっかく東京に来たのにどこにも行けず。と言っても映画館くらいしか行きたいところもないのであった。熊本にはいわゆる名画座がない。名画座はない県が多いのかな。安く2本立てが観れる場所がとて羨ましい。シネマヴェーラとか早稲田松竹とか新文芸坐とか神保町シアターとか国立映画アーカイブに通いたい。シネコンは名画座的な上映はやらないのだろうか。名画座のことは前にも同じことを書いたような気がするがどうだったかしら。

獣のふりをして
背中を丸くして
アディオス午後
夜へとびだせ

本音のうまい人
岸边に向かう人
アディオス午後
夜へとびだせ

昨日の夢に誰がいたの
東の果てに何を見たの

おじさんどこへ海の方へ
足を鳴らして 夜へとびだせ

プロペラつけて ナビを消して
声を枯らして 夜へとびだせ

三十七号から続いて



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

私だけかもしれないが、同じ名前の人がいるとちょっと気になる。平成最後の入学式、それも東京大学の。その祝辞が話題になった上野千鶴子さん。大学時代に学園祭か何かの折に講演に來られて、サインをしてもらったことがある。「私も千津子だったのを鶴に変えたの」と言われて、私も鶴に変えようかと思った。でも、画数が多いと困るだろう、という両親の気持ちを裏切ることはできずそのまま。

山本という名字は全国に多いので、「あつ、同じ名字か」というぐらいにしか思わないが、令和最初の参院選、重度障がいのお二人が国会議員となられて話題になった「れいわ新選組」の代表は山本太郎さん。彼の街頭演説を聞いている人々が、財布から次々とお札を出して寄付をしている映像をテレビで見た。理由はそれぞれだろうが、応援したい気持ちは同じなのだろう。演説を聞きな

がら、「なるほどなー」とは思ったけれど、寄付するお金があれば、私なら「鳥の劇場」のサポーターとして寄付したい。社会のために、演劇好きの私たちのために、期待を込めて一票を投じたいような活動をしているのだから。皆さんにも一票ではなくて一口をお願いしたいくらいです。

その「鳥の劇場」の公演が八月末にあるので大いに楽しみにしている。というのも、私の一番お気に入りの作品だから。魯迅原作『剣を鍛える話』を初めて観たのは昨年の「鳥の演劇祭」でのこと。もう一度見たい、いや何回も見たいと思った。九月に富山県利賀芸術公園で開かれるシアターオリンピックスでも上演されると知っていたが、富山までは行けないと諦めていたところだっただけに嬉しい。

ちよつと調べたところ、鳥取自動車道が五月に浜村鹿野温泉インターチェンジまで開通していた。鹿野がぐつと近くになった。鹿野の人からは、もうすぐ、もうすぐよ、と言われていたので「ついにその時が来た！」と開通を喜んでいるのは私を含めて何人かな？ 新しいインターチェンジで降りて『剣を鍛える話』を観に行く。青谷まで行ってしまわないよう緊張感を持って、今年の夏の最

大のイベントになる。

鹿野へ早く着きたいのだが、鳥取自動車道では道の駅「清流茶屋かわはら」に寄ってしまふ。ここは外せない。休日だけかもしれないが、レトロな音楽を演奏しているおじさんがいて、不思議な空間を作り出している。「すなばコーヒー」に似た名前のコーヒースタンドは、人気で行列か売り切れ閉店。ロシア・中国・韓国の料理イベントの日もあったりして、観光案内よりも展示やイベントが面白い「道の駅」だ。お土産に買った「落ちない岩のお守り」のおかげで、姪は高校受験で危ないところを合格できた。来年の大学受験に向けてもう一度求めよう。

この「道の駅かわはら」では忘れられない偶然の出会いがあった。突然、トイレで声をかけられたのだ。町内でお世話になっているガソリンスタンドの奥さんだった。えっ？こんなところで？場所も気にせず、ご主人のことも忘れて女同士のおしゃべりが弾む。

「働いてる時は化粧してるけど、鳥取へは温泉に入るからすっぴんや、わからんでしょ〜」

ご夫婦で月曜から土曜まで働いて、日曜は人に任せて温泉巡り。鳥取自動車道は無料で混んでないし、おもしろいものがいっぱい、温泉もいいのでよく行っているとの

こと。この奥さんも自分の好きな曲がいつも聞けるので、気に入っている道の駅。

「じゃあ、また今度、かわはらで会えるのが楽しみやね」と言って別れたものの、今のところ、ガソリンを入れてもらう時にしか会ってない。

二十年以上前にロシアに住んでいた時、自分でガソリンを入れるなんてロシア人男性ってカッコいい！と思っていた。帰国してからはセルフのスタンドが増えていき、私も入れ方をマスターしたが、値段も同じで窓も拭いてもらえることを知ってからは、このご夫婦のところに行くようになった。町内のことを話題にしていたが、「かわはら」以降は、「鳥取に行かれた？」から会話が始まる。温泉で忘れ物をした時やどこかで失くしたものが返ってきたり、とにかく鳥取の人は親切や、という理由で鳥取に行かれるリピーターである。きつとこのご夫婦は、ガソリンを入れに来ているなじみのお客さんにも「鳥取はいいで」とアピールしていると、私は信じている。

こうして鳥取のことを思ってあれこれ書いていると、暑さを忘れる。『音信不通』に感謝です。そして三十九号へ続く。

鳥取あれこれ その三十七

内田克彦

(地域研究家)

た原秀成著『日本国憲法制定の系譜Ⅲ』に、次のように記述されている。

矢部は、近衛文麿、東条英機の戦争犯罪の教唆犯であり、それと同等に扱われるべきだった。

さらに続けて、次の記述がある。

教員としても矢部は、戦後改革を逆行させた中曾根康弘を育てる(略)など、その国家主義の影響は現在にまで及ぶ。将来のために、再軍備のため「改憲」を唱える学者の戦争犯罪教唆犯としての責任を追及すべきことが、ここに《指摘》される。

矢部貞治について調べている。美穂郷土誌編集委員会が二〇一六年に発刊した『美穂郷土誌』の「第12章 郷土の著名人」には、笈雄平、林重浩、矢部貞治、近藤孝平、前田俊政の五人が取り上げられ、各々簡単な略歴が掲載されているが、鳥取市が二〇一〇年に発刊した『鳥取市人物誌 きらめく120人』には、笈、林の二人がこの一二〇人の中に入っているものの、矢部はミス・コー及び古井喜實の項で言及されるに留まっている。一九七〇年に発刊された『近代百年鳥取県百傑伝』には古井喜実執筆により載っているが、一九九〇年に鳥取県教育委員会編集により発刊された『鳥取県郷土が誇る人物誌』には載っていない。矢部は、鳥取県・鳥取市にとって忘れ去られた過去の人物となってしまうのだろうか。

矢部に対する人物評価として、二〇〇六年に発刊され

戦後の矢部について、原氏は実証的に分析しているわけでもなく、レッテル張りに等しい評価である。戦前の矢部については、確かにある時期国家権力の中枢部分に影響力を行使していたことは間違いないが、原氏のように断定的に言い切れるものだろうか。

県立図書館二階の「ふるさと人物コーナー」には、矢部貞治のコーナーが設けられていて、『矢部貞治日記』全四巻などのほか、二〇〇四年九月に特別資料展示室で開催された『矢部貞治―昭和史に残した足跡―』の図録

が備えられており、「第二章 国家のなかで（―昭和研究会、近衛新体制、海軍囑託―）」の頭書きとして、次の簡単な記述がある。

東京帝国大学教授時代の矢部貞治は革新派の政治学者として、昭和研究会に所属し、近衛内閣の新体制づくりのブレインを勤め、また海軍囑託や大東亜省囑託として活動している。このような活動の中で、日本の動向や政策決定にも関わることになった。しかし、戦局は好転せず昭和20年（1945）8月15日を迎える。その年の12月、矢部教授は南原繁法学部長に辞表を送り東京帝国大学教授を辞している。

続いて、「1 昭和研究会」、「2 近衛新体制へのかわり」、「3 海軍省囑託の役割」、「4 戦況悪化のなかで」と、項目ごとに当時の資料が示されているが、矢部の動きが今一つ具体的につかめない。

戦前の矢部の、この時期の詳細な動きを叙述する著書に、一九八一年発刊の伊藤隆著『昭和十年代史断章』がある。「矢部貞治教授は、昭和十年代政治史において決して主役であったわけではない。」とするこの著書は、一九三七年五月二八日に始まる『矢部貞治日記 銀杏の

巻』が一九七四年五月に発刊されるや「その面白さに魅了された」伊藤東京大学文学部教授が、「興味深い情報を整理し出来るだけ他の史料とつき合わせるならば、十年代史の一面を明らかに出来るのではないかと考え、これを中心とした講義」を一九七五年度と次の年度に行い、その講義原稿をもとにまとめたものである。「本講義は『矢部貞治論』ではない」と書かれているように、矢部の思想自体がストレートに伝わって来ないため、わかりにくく、読み通すには苦労する。

しばらく途絶えていた、矢部を対象とした研究書や論文が、近年、盛んに発表されている。その中で、特に目を引いたのが、二〇〇九年に発刊された源川真希著『近衛新体制の思想と政治 自由主義克服の時代』である。この著書は、『昭和十年代史断章』以前の時代に第一章を充て、矢部の政治思想である「共同体的衆民政」論について、憲政記念館蔵の一九二五年九月から一九三五年四月までの日記や一九三五年四月から一九三七年五月までの欧州留学時代の私家版の日記も利用しながら、詳細に分析している。

（以下、続く）

演じる意識下に潜む…不可思議

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

I

H某、く仮に「アッシユ」と呼ぼうゝの演技は實に个性的。演出家だけでなく、芝居に煩い僕と同僚達も「『じゆう劇場』※は、存在自体ノンフィクションだけれど、アッシユは一人(フィクション)を(抽象的に)演じてゐる！」一目置いて居るのだ。易しいとは決して云へない。ひ台詞、それも結構な分量をたちどころに諳んじて了ひ、立ち稽古では、状況に応じ、演じるキャラクターの心理に鋭く深く這入ってゆく。そして自ら曰く「ああ彼女は、今ギリギリ迄追い込まれてる状態で、さっきの私みたい、あんなのんびりした言い方する訳が無い！」云々万事こんな調子である。

II

そんなアッシユに、最近、思いがけなひ危機がやって来た。或る日全力投球の舞台が終わった彼女は帰宅、就

寝前に自身のスイッチを恰もオフにして了ふ(やうシャットダウンして了ふ)のだが、翌朝、何時に成つても、午を過ぎてても、お伽噺の「茨姫」宜しく目を醒まさなひ：昏々と眠り続けるアッシユ。その儘病院行きだった、入院して了つた事さへ。仮に瞼が開き、母親が必死に揺り動かし、状況を説明したところで、云はれる事に反応は出来てもまるでポカンとして全く覚醒出来ない。そんな事が何度か、そして客演先の東京やフランスでも起こつた。

III

さう云へば、樂壇にも嘗てフランコ・フェラーラと云ふ、究めつけの鬼才が居た。大層情感を込め、ハートに響く否搔き筆るやうな、熱い演奏をするのだが、時折感際まつてその儘失神して了ふ「奇行「病疾」の為、「舞台の駄目な」演奏家と見做され、レットルを貼られ音楽監督の座も僅か一シーズンで明け渡した。だから筆者の知る限りライヴ盤は無い。ごく僅かなうおそらく継ぎ接ぎのゝスタジオ盤にだけその演奏の名残が垣間見られ、特にネオ・ヴェリズモの(フェリーニ、アントニオーニ、ヴィスコンティら名匠と組んで)映画音楽の名指揮者として多くの名画を遺し、後は有名な指揮者を育てた名伯楽としてのみ楽史に其の名を刻んだ特異な例外的人物。確か「終着駅」が代表作だったやうに記憶してゐるが、

「モンパルナスの灯」もさうだったらうか?…

IV

元来映画では、作曲家が偶に話題に上る事があつても演奏家は滅多に論じられなひ。「風と共に」の作曲がMスタイナーだと云はれる事があつても、万人の紅涙を零した、あのヴァイオリンを奏でたのがLカウフマンだったなんて、知る由も無いだらう。其れは大抵、文字通り一夜漬けでスコアをあげた作曲家が自らタクトを揮い、スタジオ管弦楽団がその儘サントラ盤に演奏を吹き込む事も多いやうな所以かも知れない。

V

再現芸術家と云はれる演奏家、そして、皆の人物像に直接迫る役者、それにダンサー。その仕事は各れもテキスト(台本+スコア)を丹念に読み、舞台の上で演じ、演奏する経緯を直接、観客リスナーに抽象的ヴィジュアルとして届ける、知・情・意と想像力をフルに問はれるハードなもの。身体中の汗を搾り出し、血液を笑いと涙に換へる人生。中には豊かな天分に身を任せアウラを纏つて演じる者も居るだらうが、靈感の不足をアルコールやドラッグに求め溺れ墜落の最期を遂る者も。アツシユやフランコが、時に心神を喪失し意識を飛ばされた事が、果たして想像を超越る舞台上の激務の代償なのか、僕には定かで無いし、医学・科学的な裏付けを論じるものでも毛

頭無いけれど、人間の身体や、意思は、なんとも儂く脆い。そんな人間が舞台では、想像を遙かに超へ、とてつもない勇気を要求され全身全霊演じる。時に英雄になり女王に転じ、臆病者や偽善者に、詐欺師や霊媒を騙る。それが日常化し、当然の如く繰り返されるうち、つひつひ僕らは、舞台上に生身を横たへてゐる役者や演奏家の肉体的・精神的な限界を忘れて了ふのではないだらうか。無理の積み重ねが、時に様々な形で襲いかかつて来るのでは、闇が人間の多層的な精神や、心理の深層に潜んで、などと想つてみるのだけれど…此も存外、そんなに的外れな妄想でも無ひやうに思ふのである。

2019.08.01

※じゆう劇場は、鳥の劇場のプロデュースする、障害のある方とない方の演劇活動の場。今回の一枚のレスピーギ、「リュートと弦楽の為の(古の舞曲とアリア)第一〜第三集」E.F.フェラーラ指揮ローマ交響楽団 (rec. 1958)

書くに値する」と書くという衝動

土質 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

『〇文学に於ける抑圧と解放』という小説をほぼ書き了えた。

以前に一旦脱稿したと思ったのだが、いつも真つ先に読んで頂く奈良さんの奥様千枝さんに意味が分からない、という直球目の評を頂き、お蔵入りになっていたのを、そのエピソードのいくつかが捨ててしまうには忍びなく、まあ未だに意味はあまり無いかもしれないが、読み通してプロットが破綻しない程度には修復できたと思う。

ハワイのオアフ島で精神科医をしているT(奈良さんと同名、字も同じ)という学生時代からの親友がおり、この人は十二歳のとき、LSDでトリップしながらマウイ島でジミー・ヘンドリックスのコンサートを観た、という偉い人である。彼は日本人だが奥さんはアメリカ人(白人)で、彼等夫妻と三年ほど前、ハワイ島のコナで一緒に休暇を過ごした際、日本で開催された学会に奥さんも同行し、ついでに東北旅行をした話を聞いた。

山中を徒歩で秘湯巡りのようなことをし、七時間ほど迷った

挙句、気がついたら朝出た宿に戻っていて、ほんの一、二時間のつもりだったので飲み物も食料も携えておらず、這々の体で辿り着いた旅館で出してもらったレトルトカレーと水がこの上なく美味であったこと。けもの道を歩いていると猟に使ったらしい散弾の葉莖が落ちていたこと。竹林の中を音を立てずに走る術を奥さんに伝授し、これができるいと忍者にはなれない、と教えてやったこと、などといった細部を、借りたビーチハウスのガゼボ(四阿)で冷えたワインを呑みながら聞き、この話貰うよ、とTに伝えた。

捨ててしまうのは惜しい、と切に思ったのは上記に基づいた、米国中西部にある州立大学の日本近代文学の教授と学生兼助手でもある若い恋人の東北山中の道行きのエピソードである。なぜだかは分からない。読み直してみると、根幹となるプロットが膨らんで行くに連れ、この部分だけ浮き上がっているようにも思える。つまり必要性が低い。しかし書いた本人としては妙にリアル(ほぼ本当の話なんだから当たり前ですが)で最も面白い部分だと思う(これを書きたくて書き始めた小説なんだから当たり前ですが)。

大江健三郎と丸谷才一は同時代の作家、と括って良いと思うが、両作家は若い頃の僕にとつて Didactic な存在であった。教育的、指導的といった意味か(日本語訳があまりしっくりこない言葉の一つである)。それが時代精神であったのか否かは不

明だが、両者共に、小説は何か立派で難しいことが書いてなければならぬ、と考えていた様な節がある。色々な知識をひけらかすのである。学を銜う、文字通り銜学的なんである。

大江の『同時代ゲーム』は山口昌男の周縁理論を、丸谷の『女ざかり』は贈与論、『輝く日の宮』は(大好きらしい)御霊信仰を下敷にしている、偉いもんだな、こういう学者みたいな人達でないと、立派な小説は書けないんだな、と無闇に恐れ入っていたが、今読み返してみると、そういう部分は逆に邪魔なんである。ケレン、虚仮威し、承認欲求、な〜んていう言葉が脳裏を過る(でもふたりとも今でも好きで、特に丸谷の長編小説は繰り返し読む。やはり「師」の一人です)。

読んでも意味のわからない小説というのは困るが、読む意味がある小説、なんていうものは無いんじゃないだろうか、と思うようになった(諦観ともいう笑)。

以前に書いた小説で、しつくりこない日本語訳よりは英語をそのまま使う方が良い、といったようなことを書き、その例として「Contrived」を挙げている。英和では「不自然」、「わざとらしい」と素っ気ないが、英語の辞書を引くと、「Obviously planned or calculated; not spontaneous or natural; labored, *obviously* (見るからに) (labored) (工けた) (と) (これでもか、と濃密である。こういつた、「意味が凝縮された」重層的な説明が必要な」言葉はそのまま英語の方が良いんじゃないか、と当時の僕は書いている。敢えて訳せば「作り込み過ぎ」

か。

読む意味がある小説を書くんじゃないの。自分が結構賢いと(こつを)披露して進ぜようじゃないの、という意気込みで書く”Contrived”になり易い。

(因みに Didactic は Intended to convey instruction and information as well as pleasure and entertainment 即ち「教育的」では as well as pleasure and entertainment が伝わらなく)

同時代の天才には奥泉光が在るが、この作家には大部の作品が多く、書くのが楽しくて楽しくて仕方がない、というのが伝わってくる。芥川賞作家で純文学から出発しているが、表層的にはエンターテイメントに傾いて来てはいるものの、下層では黒々としたモノが時を巻いて横たわる気配がある。それは村上春樹の世界に潜む闇より暗くて深い。軽薄で神経症的な笑いを誘発する語り口と板子一枚下に遍在するおぞましさは共依存的に相互を助長する。

書くのが楽しくて楽しくて仕方がない、というのは見た目だけで、書くことは黒大蛇を深層に封じ込めておくための Therapeutic、もしくは祈祷的行為で、不安で書くのを止められないのかもしれない。

生理的というか、作者もなんでこんなものが自分の中から出てきたのかわからない、という感じの一筋縄では行かない文章が面白い。書く方も面白いと思う。

屋台

あきの素生

(くうねるめがね)



久々にお祭りらしいお祭りに行き、屋台を堪能した。

辺りをぱっと見回して感じたのは、屋台の顔触れが、以前とは変わっているなあとということ。たくさん屋台が出ている大きなお祭りに行くことが稀だというのもあるけれど。

特に存在感があったのは、「チーズハットグ」。いくつも屋台が出ていた。どんな食べ物か知らなかったのだが、食べてみると、チーズ入りのアメリカン・ドッグであった。このチーズが非常にのび——る。「映える」やつだ。と思いつつ、大抵撮る前に食べてしまうので、今回も「映え」を活かすことはできなかった。もちろんおいしかった。このほか、「ヤンニョムチキン」や「ケバブ」などの屋台も。グローバル化している。別の屋台には「テポラフ」なる文字が見え、こちらも海外から来た新しいメニューかと注目したら、「フラポテ（フライドポテト）」が右から左へ書かれているだけであった。

先のとんがった細長い紙袋は昔と変わっていないくて、ほととした。

「冷やし〇〇」も目についた。暑すぎるものな、日本の夏。

「冷やしパイン」の屋台では、メロンやスイカも冷やされていた。パイナップルは普段から好きだが、他の屋台を冷やかしながら串に刺さった冷たいパイナップルにかじりつくのは、また格別だ。

ビールのお供に、たこ焼きや牛串、焼き鳥などを買って、もう少し何か、さっぱりしたものを、と物色している、行く手に「冷やしきゅうり」なるものがある。おこれは、と列に並んだところ、祭りの序盤であったにも拘らず、目の前で売り切れるという憂き目であった。暑いし喉乾くしビール飲んでからしよっぱいものが食べたい(甘いもので飲めない質である)という人間にとって、きゅうりの漬物は魅惑の存在だ。以前参加した別のイベントでは、ピクルスをカップに入れて売っていて、こちらも人気だった。さっぱりするといった点では、「ガリ」とかでもいいかもしれない。そんなことを考えながら、ほかに類似の屋台がないかとうろろうろしたが、見つけれなかった。幻のオアシスみたいだ、「冷やしきゅうり」。

子どもの頃のレギュラー屋台といえば、前出のフライドポテトのほか、フランクフルト、はしまき、焼きそば、焼きとうもろこし、いか焼き、たこ焼き、たい焼き、今川焼き、カステラ焼き、わたあめ、りんご飴、かき氷、ラムネといったところだろうか。大体毎回食べていたのは、フライドポテト、かき氷（レモン）、たこ焼き、たい焼きか今川焼き（クリーム）だった。

そのほかに楽しみにしていたのは、カラフルな細いチューブに入ったラムネ（飲み物ではない方）のようなお菓子。でも、ラムネと違って酸っぱくない。白くて甘い練り粉といった感じだ。夏祭りではなく、秋のお祭りで買っていたような気もする。名前がわからなかったので調べてみたら、「マンボ」「マンボ菓子」と言われるものだとわかった。主な材料はコーンスターチなのだそう。お祭りで売っていたのは30センチくらいの長いものだったが、5センチくらいのマンボ菓子が数本入った商品もあり、そこらは駄菓子屋やスーパーで売っているのを見た覚えがある。思い出したら食べたくなって、スーパーのお菓子売り場を探してみたが、残念ながら見つからず。気長に探すことにする。

食べもの以外の屋台も楽しみだった。お面、光る棒、金魚すくい、ヨーヨー釣り。型抜き、スライム、スーパー

ボールは、男子に人気だった。特に型抜きは未知の世界で、何をしていたのか、どういったものなのか、いまだによくわかっていない。

屋台の灯り、甘かったり香ばしかったりする、雑多な匂い。屋台があるだけで、そこに「非日常」が色濃く立ち上る。

お祭り用にもらったお小遣いを何に使うか考えながら、友達と行ったり来たりしていた。当時感じていたわくわくする気持ちは、まだ損なわれていない。



イラストあきの素生

映画のはなし



ドラメリア (座敷わらし)

七月のことだが、めずらしく映画を観に行った。封切られたばかりの新海誠監督『天気の子』。映像と音楽の美しい作品で、満足して帰った。カップルの姿もそこそこあって、そうね恋人同士で観るのにいい雰囲気映画よねとなんとなく納得。

それからしばらくして、『デートで初めて行った映画は何ですか?』(山崎書店刊)という本を読んだ。カフェオーナー、映画監督、編集者……さまざまな年代・職業の人たちが語る映画と面白い。くすぐったく甘ずっぱいエピソード満載だった。

初めて恋人(ぼい)相手と行った映画は、『シン・レッド・ライン』テレンス・マリック監督。当時親しかったサークルの先輩と。相手が好きな監督で、二十年ぶりの新作と聞いて出かけたのだった。しかし中身について予備知識がなかったのがまずかった。太平洋戦争のガダルカナル島の戦いを描いた戦争映画だったのだ。一七〇分の間、風がなびき、草がそよぎ、南の島の濃い緑と静け

さの中で、人がバツタバタ死んだ。なにか無常感に駆られ、映画館を出た後ふたりに川沿いを延々と歩いた。無言だった。

今にして思えば、明らかな選択ミスだった。もう少し話の弾む楽しい作品をチョイスすればよかったのだ。あるいはミス研らしく、ミステリー映画か?

……ここまで考えて、いやそれもどうかと思ひ直す。『ユージュアル・サスペクツ』を違う人と観たとき、お互いの推理が食い違つてなにやら険悪なムードになったのだった。あんたのロジックはおかしい、いやそれはそちらだ云々。譲れないものがあつた。若かつたのだろう。今となつては、それも思ひ出。

・編集後記:

最近ヨーグルトメーカーに惹かれています。甘酒や塩麹、ローストビーフまで作れるとか。ものぐさには過ぎた機械だろうかと思案中……。

ドラメリア(編集長)

鳥取県広報連絡協議会の総合情報誌『とっとりNOW』123号(秋号)に定有堂書店が紹介いただいています。三頁にわたる「ここにこの人」コーナー。角田治さん(文) 菅野雄一さん(写真)。

奈良敏行(発行人)